

学校教育目標		『つながり』を大切に 自ら未来を切り開いていく 児童の育成					総合評価		
運 営 方 針		○『TSUNAGARU～人と、世界と、未来と、心と。』を合い言葉に、強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちに「予測不可能な時代を生き抜く力」を育てる。 ○保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。					B		
令和5年度の成果と課題		本年度の重点目標		具 体 的 目 標					
○論理国語の授業マニュアル作成 ○読書環境の整備 ○自主学習の推進 ○自己肯定感の向上 ○地域への愛着 ○集団づくりの取り組みによる自尊感情の高まり ●「書く力」の向上 ●家庭での読書習慣の定着 ●学習することが楽しいと感じる児童の育成 ●HSC傾向にあたる児童の共感的理解 ●家庭での生活習慣の改善 ●小中一貫教育推進のための学園組織の再構築		◎言葉にこだわった論理力指導による確かな読解力の育成		○系統的な論理力指導による読解力（書く力）の育成					
				○体系的な読書活動の推進による語彙力（知識語彙・使用語彙）の獲得					
		◎自己を見つめ直し他者を思いやる心の育成		○学級活動の充実と異学年交流活動の推進					
				○他者理解と人権教育の充実					
		◎運動習慣の定着による基礎体力の向上		○興味や関心を中心にした運動習慣の定着化					
				○課題の分析や生活習慣改善による基礎体力の向上					
		◎小中一貫教育、教職員の働き方改革の推進		○学園構想に基づいた小中一貫教育の推進					
					○業務の効率化による働き方改革の推進				
評価項目	具体的目標（評価小項目）	具体的方策・評価指標		自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策	
読 言 解 彙 力 に の こ 育 だ わ っ た 論 理 力 指 導 に よ る 確 か な	縦のつながりを意識した論理力指導による読解力（書く力）の育成	領域「書くこと」の系統性を意識した指導を通し、各発達段階での知識・技能の定着を図る。単元末には「書く」言語活動を必須設定にするなど、書く機会を多く設ける。書くことが昨年よりも得意になったと答える児童80％以上を目指す。		A	B	ライティングチェックリストの活用、研究授業の実施により、系統性を意識した指導ができた。各単元で「書く」言語活動の設定し、家庭学習・パフォーマンス課題・思考力テストでも書く機会を確保できた。「昨年よりも文章が書けるようになった」と答える児童が91％いた。	・視写や作文を中心とした書く機会の確保 ・パフォーマンス課題や思考力テスト等による書く機会の確保 ・系統的な「書く」指導の継続 ・すららドリルによる個別最適化学習 ・放課後学習の継続	・書くことは、論理的思考を育てます。インターネットを利用した教育の一方で、これからも「書く」「読む」ことをご指導してください。 ・問いを分析したら問いの背景に迫ることは、主張する根拠にもつながり、聴く力や伝える力の育成にも効果があると考ええる。 ・読書環境を整備することで、子ども達が『素敵なお本に出会えた』『本が好き』と感じることができる。それに伴い、語彙量の増加や語感の成長にもつながると考える。	
		文章の内容を論理的に理解する系統的指導を通し、児童の「書く」力の育成や読解力向上につなげる。県の国語科の学力調査において、全学年が県平均を上回ることを目指す。		B		県の国語科の学力調査において、6学年中5学年が県平均を下回る結果となった。しかし、書くことについて、項目で見ると、6学年中3学年が県平均を上回り、「書くこと」について研究をしてきた成果が見られた。			
	様々な読書活動の推進による語彙力（知識語彙・使用語彙）の獲得	様々な読書活動や環境整備を通し、読書意欲の向上や知識語彙の獲得を図る。昨年度に比べて、新しく言葉を知ることができたと答える児童90％以上を目指す。		A	A	全学年の読書スピーチ・やまびこの本の廊下設置・たてわり読み聞かせ・学期に1回のえのほんひろばなど、知識語彙を獲得するための活動ができた。しかし、知っている言葉が増えたと答えた児童は86％だった。語彙の獲得を図るという活動の目的を児童と共有しきれていないことに課題があると考ええる。	・読書活動の充実 ・活動目的の明確化		
		「書く」「話す」など、新しく知った言葉を実際に使う機会を確保し、習慣化することで、使用語彙の獲得を図る。新しく使える言葉が増えたと答える児童80％以上を目指す。		A		言葉の宝箱の掲示・活用や、系統性を意識した読書感想文の指導により、使える言葉が増えたと答える児童が90％いた。くり返し指導を行うことで児童に自分で書くことができる実感を持たせることができた。さらに、児童の表現を豊かにするための手立てを講じていく。			・学習単元と関連付けた言葉の宝箱の活用
育 自 己 を 見 つ め 直 し 他 者 を 思 い や る 心 の	学級活動の充実と異学年交流活動の推進	学校での生活がより豊かな集団生活となるように、集団活動の充実を図る。児童が互いによさを認め合う活動を取り入れ、自分にはよいところがあると思う児童90％以上を目指す。		B	B	・帰りの会に、友だちの良いところを発表したり、学校行事に取り組む前には前向きな言葉がけを行ったりした。学校行事の後には、振り返りを行い、お互いの良さを認め合えるようにした。しかし、「自分にはよいところがあると思う」と答えた児童は、86％という結果になった。	・児童が互いによさを認め合う活動の充実 ・東っ子集会の継続	・児童が登下校する様子等を見ていると、助け合い、共に生きているという心のつながりを感じます。先生方のご指導のぬくもりが、児童に伝わったものと判断しています。 ・高め合い、安心して過ごせる集団の一員であることは、子ども達にとって幸せなことであると強く思う。	
		学級活動や東っ子集会などでの感想交流や振り返りカードで、友だちのよさを見つけさせ、活動意欲を高める。東っ子集会で、上級生がリーダーシップを発揮できるように計画、準備を行う東っ子集会を年間3回以上行う。		A		東っ子集会を年間4回行った。1回目は名前リレーとクイズ、2回目はペア読書、3回目は五條東かるた、4回目は6年生へのメッセージを書く活動を行った。どの活動でも、上級生が下級生のお手本となり、友だちのよさを見つけることができた。			・高学年の主体性が発揮される機会の確保
	他者理解と人権教育の充実	先生や友だち、地域の方と挨拶を通してつながることで他者理解や人を思いやる気持ちを育む。挨拶向上委員会のメンバーを募り、活動することを通して、挨拶をしている児童の割合90％以上を目指す。		A	A	「先生や友達、地域の方々に毎日挨拶している」と答えた児童が93％いた。しかし、元気のいい挨拶ができている児童は少ない。運営委員会が中心となって朝の登校時、挨拶運動を実施した。	・全校朝会での挨拶についての講話 ・人権めあてに合った毎月の絵本の読み聞かせと発表		
		毎月の人権のめあてを学級に掲示するとともに、全校朝会や学級で取り組みを進め、学期に1回人権だよりを発行し、学校での取り組みを家庭に知っていただく。		A		毎月の人権めあてに合った絵本の読み聞かせや発表を行い、振り返りのワークシートから児童の人権意識の高まりを感じることができた。また、人権だよりを通じて、校内での人権教育の取組の様子や児童の様子を全校児童や保護者に知ってもらうことができた。	・人権講演会の保護者への呼びかけ		
運 動 習 慣 の 定 着 に よ る 基 礎 体 力 の 向 上	興味や関心を中心にした運動習慣の定着化	運動能力や興味・関心に沿ったハッスルキッズを学期に1回程度行い、外遊びチャレンジも実施していく。また、校内表彰等を通して、運動が好きな児童を育成する。身体を動かすことが好きな児童90％以上を目指す。		B	B	児童の体力向上に向けて、体育委員会を中心に、ハッスルキッズや外遊びチャレンジを学期に1回実施できた。しかし、「身体を動かすことが好き」と肯定的な回答をした児童の割合が85％という結果になった。今後も、楽しみながらできる遊びや達成感のもてる指導をしていく必要がある。	・自信をもたせる指導や支援 ・外遊びチャレンジや課外活動の校内表彰	・休日に運動場や体育館の使用ができれば、体力の向上につながると思う。 ・体力の向上に向け、楽しみながら体を動かす習慣をつけてあげてほしい。 ・生活調べのお返事を、全員に返していることを知りました。大変な作業ですが、子ども達を大切にされていることに感心させられました。 ・引き続き、規則正しい生活の大切さを伝えていってほしい。	
		休み時間に各学年が進んで身体を動かしたり、遊んだりできるよう、週に1回体育館を開放する。また、児童が活用できる道具を各学年に割り当てる。		A		体育館を週に1回開放したり、各学級に遊び道具を割り当てたりすることができた。体育館開放時には、普段校舎の中で過ごす児童も、体育館で身体を動かす様子も見られた。			・週に1回の体育館開放
	課題の分析や生活習慣改善による基礎体力の向上	体力測定の結果を基に児童の体力・運動能力の課題を明確化し、系統だった体力・運動能力の向上に取り組む。年間を通して、授業で柔軟体操を取り入れる。各学年5種目以上で県平均を上回ることを目指す。		B	B	児童の課題を把握し、課題に応じた指導をすることができた。また、今年度からは児童の柔軟性を高めるために、授業時に東っ子ストレッチを取り入れることができた。しかし、体力テストでは走能力に関する数値で課題が見られた。	・東っこストレッチ（柔軟体操）の継続 ・中学校と連携した体力テストの事前指導		
		生活調べを活用して、保護者の積極的な協力を得ながら自身の生活習慣を振り返る機会を学期に1回もつ。「早寝・早起き・朝ご飯」の項目において、達成率85％を目指す。		B		家庭と連携しながら生活調べを学期に1回実施できた。しかし、「早寝・早起き・朝ご飯を意識して生活している」と肯定的に回答した児童は82％であったため、引き続き規則正しい生活の大切さを効果的に伝えていく必要がある。生活習慣は家庭の協力が必要不可欠なため、どのように働きかけられるかも大きな課題である。	・保健指導での啓発 ・保健だより等を活用した家庭への啓発		
小 中 一 貫 教 育 の 推 進	学園構想に基づいた小中一貫教育の推進	・主幹教諭を中心に小中の連携を密にし、東部学園の全職員が共通理解の上、学園運営に参画するため、東部学園職員全体研修を3回行う。研究授業について適宜交流する。		A	A	当初の計画通り、3回にわたる職員全体研修を実施することができた。今年度は第1回が講演、第2回がふるさと学習発表会であった為、研究授業後の協議は1度のみとなったが、小中の職員が顔を合わせ、授業や児童生徒の様子等に関する意見交換を行うことができた。	・東部学園職員全体研修（全3回）の継続 ・研修内容の検討 ・東部学園全職員による交流の場の設定	・小中一貫教育には期待しています。 ・施設分離型の小中一貫教育は難しい部分も多くあるだろうと思います。まずは学校間の交流を大切にしてください。 ・業務改善を推進して、教職員自身の家族との時間を確保できるように願う。	
	業務の効率化による働き方改革の推進	・ICT機器を活用した業務改善やNO残業デーの設定をし、1ヶ月の平均時間外業務時間が45時間以内の職員を75％以上にする。		B	B	会議資料やアンケートのペーパーレス化等、ICT機器活用による業務改善は随分と進んだ。NO残業デーや日々の退勤時刻についても積極的に声かけをし、職員への意識づけができた。しかしながら平均時間外業務時間が45時間以内の職員が75％以上の月は4ヶ月だけだった。	・更なる業務の効率化 ・各業務のオペレーションの構築 ・業務精選の上での削減		
今年度の成果と次年度への課題		[成果] ・ライティングチェックリストの作成や視写の実施などを行ったことで、書く力を高めることができた。また、書くことの苦手意識を減らすこともできた。 ・えのほんひろばや読書スピーチなど、図書に親しむ活動を充実させることができた。また、語彙力を育成することもできた。 ・ふるさと学習を充実させる中でキャリア教育を行い、小中一貫した指導を行うことができた。コミュフェスなど地域とつながる機会の確保ができた。				[課題] ・低学力傾向の児童が多く、県の学力テストではほとんどの学年で県平均を下回っている。 ・お互いの良さを認め合う取組を行ってきたが、自尊感情が低い児童が一定数見られた。 ・挨拶ができているという児童の自己評価は高いが、客観的に見ると大きな声で自分からできている児童は少ない。 ・児童の柔軟性を高めることができたが、走能力に課題が残った。 ・早寝早起き朝ご飯を意識できていない児童が一定数見られ、家庭での生活習慣の改善が必要である。 ・会議の見直しやICT活用など様々な取組を行ったが、時間外業務時間が45時間を超える職員もいる。			